

毎月一回15日発行昭和49年8月15日発行・第56号(昭和45年9月4日第三種郵便物認可)

リベルテール

8 月 号



Libertaire VoL, V, No9

無政府主義者の機関紙

昭和四十五年九月 四日第三種郵便物認可
昭和四十九年八月十五日発行第五十六号

リベルテール

定価一〇〇円(郵送料共)

夜の樹々

暗い夜に
 おさえつけられたように
 在る
 暗い夜が、つつんでいる
 樹々の
 おしころされた全体に
 はりつめた意志が
 あらゆるものを
 けしちらし
 突出し
 突然に自由を求めようとしている
 全体をつつみ
 がんじがらめにおしころされようとしている樹々が
 そんなものを耐え
 耐えた力を爆発させ
 枝をのぼし
 葉をふくらませようとしている
 暗い夜だ
 暗い
 夜の中で
 樹々がいきぶいている

目次

管理社会	宇波 明	P1
↓来たるべきネオ・ファシズムの本質とは？		
労働運動の精神	島 哲	P2
小川正夫との出合	杉藤 二郎	P3
芝浦製作所斗争史の一コマ	坂入 純 二	P4
アナキズム方法論(1)		P6
野 火		P11
カー『バクーニン』論(2)	マックス・ネットラウ	P16

管理社会

↓来たるべきネオ・ファシズムの本質とは？

宇 波 明

6月12日保利行政管理庁長官は、行政監理委員会に対し「行政機関等での電子計算機利用に伴うプライバシー保護に関する制度のあり方」について諮問した。四十九年度末までに委員会の答申を受け、五十年中には「プライバシー保護法」を成立させたいらしい。あきらかに「プライバシー保護法」と抱きあわせて国民総背番号制を推進するための布石である。コンピュータは来るべき管理社会のための最重要兵器であり、すでに国・地方公共団体・政府関係機関などでの利用は一、〇一八台にもぼっているといわれ、社会保険だけでも、すでに国民の半数にあたる五、〇四二万人が登録されている。

では、彼ら政府・ブルジョアジーは、管理社会化化することによって、何をしようとしているのであろうか。実をいえば、彼らブルジョアジーでさえ、よく分らないのが実情であろう。ファシズム化は彼らブルジョアジーに何ももたらさない。にもかかわらず、彼らはファシズム化しようとしているのである。戦前の天皇制ファシズムにおいては、彼らは海外侵略という形で、ファシズムを

彼らにもわかるように可視化することができた。しかし今進んでいる管理社会ーネオ・ファシズムを、彼らブルジョアジーは可視化することができないのだ。武力海外侵略といっても、戦前とは軍事情勢が違う現在では自殺行為でしかないだろう。経済的侵略といっても、資源ナシ・ナリズムはますます強くなっていき、資源小国としての日本は、シリ貧が運命づけられている。すなわち、彼らブルジョアジーは来るべき管理社会に何の展望も持ちえていないのだ。

しかし、問題はそれだけに止まるのではなく、管理社会化は、かつて貴族達が行ったブルジョアジーを形成させたように、ブルジョアジーのもとに新しい彼らにとってかわるだろう支配階級を生みだすにちがいない。すなわち、手段としての権力から、目的としての権力、この転換こそ、ネオ・ファシズムの本質である。西と東の共存とは、何よりもブルジョア理念の没落であり、両者が依拠するところのブルジョア理念が崩壊しつつあることによって、両者の対立もまたその意味を失いつつあるのである。ウォーターゲート事件におけるアメリカ民主主義はブルジョア理念の最後の残り火にすぎない。

「労働運動の精神」

島 哲

今、私は机の上で大杉主幹の「労働運動」を読んでゐる。それは、杉藤氏が私に寄贈してくれたものであり、いつもながら深い感謝の念で一杯であります。一号一面の「労働運動の精神」という標題で書かれた一文を何度か読み返している。過去の運動におけるこの一文が現在の私の胸中に時間を越えて、^{びんごう}滲々として入り込み新たな感激と、複雑な心境で一杯です。それは半世紀が、過った今、尚普通の真理が脈々と、波打っている。

大杉は「労働運動といえば、誰れでも先づ、賃金の増加と労働時間の短縮を要求する」と書き、それは「全く資本家によって決められる。工場内の衛生設備、職工雇入れ、解雇の権力、原料、機械などについての生産技術上の権力、経営上の権力も、すべて皆資本家が握っている。僕等は、此の専制君主たる資本家に対しての絶対的服従の生活、奴隷の生活から、僕等自身を解放したいのだ」と続く。そして、現在は、民主主義というべールにつつまれた、権力主義がはびこっている。賃金は、組合の上部幹部と管理者との間で、易々と決定する。労働者はただ上部からの闘争指令を、仰ぎ斗争完了という情報のも

とで終結する。胸に、春斗勝利パッチをつけ喜々としてゐる。労働時間は短縮され、隔週二日制、会社内の衛生設備もよくなった。労働者の雇入れも、組合幹部の手ずるの間は、形ばかりの試験で入社する。一方的な解雇もなくなくなったが、既成運動にあきたらない労働者は、組合からの統制処分や会社からの懲戒処分という形で、弾圧が加えられる。転勤や企業内での転職は、組合への忠誠を踏絵として交渉される。批判分子は後手に廻される。現在では、大杉の前文は「全く権力家によって決められ、此の専制君主たる権力家に対して絶対的服従の生活、奴隷の生活から、解放したいのだ」と書き換えねばならない。党派が権力を指向してきた、なれの果てである。今は、資本家と権力者の横暴と官僚制度が網羅されている。私は、今度の参議院選の組合組織内候補の、みも知らぬ人間の為、珍奇なパンフと写真をもって動員表のノルマを果す可く、あごの先で、こき使われる。大杉はやはり同文でかく言う「労働運動は人間である限り、生物的要求だけに止まるものではない。それ以上に進んだ人間的要素を持っている。人間的要素を見ることが出来ないものには、労働運動の本当の理解は出来ない。労働者が自分の要求の中の此の人間的要素をはっきりと自覚しない間は、本当の労働運動に進むことは出来ない」

と。マルキストの奴等は、大杉の言葉を借りれば生物的要求だけに留め、官僚として、安穩と暮し安定した職業をみつけた。人間的要求を除外して、個の生の躍動を、全体性の中に封じ込め、何の労働組合か、労働運動か、これが山賊でなくしてなんであろうか、最も大事な理念を隠蔽し、迷妄と幻想の暗闇に純粹なる労働者を引っ張り込んだこの恨み、はらさいでおくものか、怨念と信念で、資本家と権威主義者のはびこるこの世界を一変せしめようではないか、先人達が血と汗で斗ってきたように私達の全生命をかけて山賊集団を、あの手この手で切り崩さねばならない。大杉の次の言葉を課題に。「労働運動は労働者の自己獲得運動、自主自治的生活獲得運動である。人間運動である。人格運動である。」

小川正夫との出会

杉藤 二郎

私が彼を知ったのは、一九五一年私がガリ版で新聞を出しはじめた頃の事である。

私から原稿を書いてほしいと手紙を出したら、折返しその返事が来て、少し時間をくれとのことであった。

それから十日程経って、原稿が届いた。

その事があってから間もなく、名古屋の生家へ立ち寄

りかたがた、愛知県知多郡大野町にある小川正夫君の家を訪れた。

小川さんの家は、大野海水浴場に近く、二、三軒先には小川の河口があり、磯の香が漂ってくる。オゾンの流れるよき漁師町でもある。

小川さんの話によると、近頃では漁もだんだん少なくなり、常滑の先まで漁船は外海へ出掛けねば魚は取れず、この町（大野町）は衰微の一途を辿っているとのことであった。

小川さんの家族は子沢山で、長女は嫁にやったが、まだ小さい子供が多く、奥さんは近くの幼稚園に勤めに出ている。

私の訪問をお子さんが告げに行ったのか、すぐに奥さんが戻って来られ、お茶など用意して挨拶もそこそこに、また職場に行かれた。小川さんは私と話しながら、翻訳の仕事をつまげられた。

見受けたところ、生活はあまり裕かではないように思われた。

私は小川さんが泊ってゆっくりして行けと言うのを断り、又の日を約し、二時間程居て帰った。

それ以来、私は名古屋へ出る度に、立寄ったものだ。最後に私が合ったのは、一九五七年の秋で、私の母が死

んだあと、片付けをしていた時、名古屋地協を母の家で開いたが、伊串、すみぜんいち、小川藩（息子）達、およそ十人ばかり集った。その時の話題は忘れたが、何でも私の出している新聞に協力すること、一人でも多く同志を殖すことだったと思う。

その晩、伊串と外一人私の所に泊り、夜、円導寺筋を三人で飲み歩いたりしたものだ。忘れていたが、その後二、三回小川さんが私の家に来たことがある。

それは、小川さんが娘の家を借りて塾を開いたので、何か英語の本を持たないかという用件があった。私はさがしてみるからと、二、三日後を約束して別れた。私は母に頼んで隠していた本の中から、昔、丸善で買った英語の本三冊をさがし、渡したのだが、その時は一時間程話して帰って行った。それが、今となってはお別れであった。

私は半月程で、売るもの、やるもの、焼くものと処分し、弟とも別れて九州に帰った。

交通は一九五七年の賀状が最後である。

手許にある第九回JAF全国大会の寄書きに、小川、山鹿、副島、久保さん達、亡くなった人達の思い出の筆の跡。

一九五七年、小川さんの年賀状のペン画に添えた挨拶。

北海道では百姓達は餓えている。ハンガリヤでは、折角芽が出た労働者評議会のイニシァチブは、ふみにじられてしまった。いやな鳥どものせいだ。今年は奴等が悲鳴を上げますように。元且

(一九七四・七月記)

芝浦製作所（斗争史の一コマ）

田中久重が田中製造所をおこし、揚水機を作ったのが一八七六（明治九）年である。

田中製造所は一八九三（明治二六）年に、三井財閥の経営となり一般機械の制電機部門に進出した。このとき芝浦製作所と改称した。

一九〇九（明治四二）年、G Bと提携し、三九（昭和一四）年七月一日、弱電メーカーの雄である東京電気と合併、東京芝浦電気と改称し資本金八七〇〇万円、今日

の独占資本となった。

労働者組織ができたのはようやく一九一五（大正四）年、友愛会芝浦分会であった。

一九一九（大正八）年、八月に立憲労働議会議会袖ヶ浦支部、一月に芝浦技友会が結成された。芝隆会芝浦支部が結成されたのもこの頃である。

二〇年三月一七日・二四日、機械工が争議をおこした。労資戦争であったが、同時に内部でのアナ・ボル抗争も激しく、争議はついに敗北に帰した。

翌二一年、芝浦製作所内に分散していた四組織が合同して、「芝浦労働組合」を結成した。企業組合のハシリである。そして組合はアナ系が主勢を占めた。

二二年九月一〇日、「全国労働組合総連合」創立準備委員会が神田の松本亭でひらかれ、石井紀唱が出席している。九月三〇日、大阪天王寺公会堂での総連合結成大会は、総同盟の裏切りと官憲の圧迫でついに分裂した。このアナ・ボル論争の大会場に、佐藤陽一と天土松太郎が代議員として出席している。

二六（大正一五）年一月三十一日に結成された「黒色青年連盟」には、芝浦労組からも関わっている。

二七（昭和二）年五月十五日、芝浦労組は芝浦サムライ倶楽部で昭和二年度定期大会をひらき、宣言・綱領を

発表した。綱領は次のとおりである。

一、階級闘争を以て労働者階級の完全なる解放運動の基調とする。

一、自主自治の精神と、組織ある行動とによって、組合の戦闘的機能を最も有効に、かつ敏速に發揮せしむるを以て組合組織の原則とす。

一、労働者階級の産業別、並びに地方別組合組織に努力し、進んでは全国的総連合の組織に団結せしめ、なお国際的労働者階級の団結を標榜す。

(『労働運動』第五卷第六号から)

当時、芝浦労組内の勢力分野は次のようであった。

自由連合派、鍛冶係・板金係・銅工係・鉄板係・鋳物係・変圧器係・変電盤係・配電盤係・小物係・木工係。

評議会系、家庭用具係・メートル係・制御機係。未組織、工具係・修繕係。

(『労働運動』第五卷第三号から)

三一（昭和六）年、芝浦製作所は鶴見に大工場を建設し移転することになった。当時の『自由連合新聞』によれば、会社は賃下げと三分ノ二賦首を強行しようとした。

二月一二日から一、三〇〇名がストに入ったが、同月末七〇名の犠牲者を出して敗北した。

世は反動体制一色に塗りつぶされ、組合は衰退の一途をたどるのである。